

## 闘牛を育てる、 「伝統」を育てる

菅 豊

すが ゆたか / 東京大学

いま、私は地域の「伝統」文化に参加し、その文化に介入しながら、その「伝統」を共創するフィールドワークを行っている。その過程で私は、「伝統の担い手」として相応しい人間に、厳しく育てられている。



なかなか歩いてくれない天神と苦闘する私(施愛 東2010年9月5日撮影)。



天神の入場(室井康成2012年10月7日撮影)。



ハナギをほどくの、もたつく私(Michael Dylan Foster 2013年10月6日撮影)。

### 闘牛を育てる

新潟県小千谷市東山地区。そこでは、国指定重要無形民俗文化財「越後の牛の角突き(以後、闘牛と表記する)」が行われている。闘牛は日本のいくつかの地域でも行われているが、越後闘牛の最大の特徴は、対戦が最高潮に達したときに双方の牛を引き分けて、勝負をつけないところにある。

私は、いまその闘牛の勢子となり、牛持ち(牛の所有者)にならせてもらっている。その牛の名前は「天神」。2015年で11歳。強い牛である。私は天神の牛持ちであるが、実際にそれを育ててくれているのは東山のテッチャン一家である。私は日頃、東京に住んでいるために、天神をテッチャンの家に預け、飼育をしてもらっている。朝晩の「餌くれ」(給餌)や「あっぱかき」(糞の掃除)など、日頃の世話はテッチャンとそのトウチャンに任せきりである。テッチャンは無類の牛好きで、横綱格の牛を育て上げたこともあって、その飼育の技量には定評がある。そのテッチャンに育ててもらったおかげで天神も出世し、2012年8歳の年に年間最優秀牛の栄冠に輝いた。私は、ほぼ毎月小千谷に通ってはいるが、牛を育てているなどと、とても言えたものではない。しかし、その程度の私をテッチャンは前面に押し出し、実際の闘牛の場面では一番目立つ檜舞台に立たせてくれている。

### 鼻から縄を抜く

闘牛は、当たり前であるがその対戦の場面がもっとも脚光を浴びる。多くの観客の前で熱き闘いを披露するのが、まさに檜舞台。牛持ちたちは、自分の牛を誇らしげに曳きながら闘牛場へと入場してくる。牛を場内に曳き入れることは名誉であり、誰もがやれるというものではない。両牛入場が完了すると、所定の場所で同時に合図の手を挙げてハナギをほどく。ハナギとは、曳き綱に連結する牛の鼻に通された細縄で、対戦時に互いの牛の頭を合わせたところで鼻から抜き取られる。ハナギ抜きは、闘牛のもっとも緊張する瞬間である。そのタイミングを間違えると、相手に先に飛び込まれ勝負がついてしまうこともある。失敗は許されない。

闘牛に参加するためにはさまざまな技術が必要で、地元の間人は子供の頃から牛飼いを通じて、そのような技術を身につけている。牛の曳き方、繋留方法、綱の結び方…。40歳も過ぎて、よそからやって来た私が、そのような技術を身につけてはいずれもない。その技術はまた、教えられてすぐにできるというものでもない。何度も同じ所作を繰り返すなかで自然と習得されるものなのである。1トン近くもある未去勢の荒ぶる雄牛を、闘牛前の意気込んでいる状態のなか、なだめすかしながら鼻面の綱を解いたり結んだりしなければならない。普通の牛持ちならば、長年の経験から泰然自若とやっているの、いかにも簡単にやっているように見えるのだが、素人がやるとたいへんなことになる。牛は、じっとしていないから引きずり回されたり、運が悪いときには蹴られたり、角で突かれたり。自分の牛の対戦前には、ハナギを抜きやすいように簡易的なハナギ結びに作り替

「伝統」を確認し合う「伝統の担い手」たち (渡邊敬逸2014年4月29日撮影ビデオより)。



えるが、その特殊な結び方を身につけていなかった私は、いつもトウチャンにハナギこしらを拵こしらえてもらっていた。

### 失態、そして叱責

あるとき、天神の出番が回ってきて、いつものようにトウチャンにハナギを拵こしらえてもらい、牛の繋留場から天神を曳き出した。天神はいまから闘牛ということで、かなり気合いが入っている。頭を下にしてなかなか前に進んでくれない。こちらも全力で曳き上げるのだが、到底牛の力に敵うはずもない。音を上げながらやっとの思いで闘牛場に入場した。さあ、いざハナギ抜き…。

ほどけない。ほどけないのである。天神を曳いてくる道のりで、その綱はしっかりと締まってしまった。いくら引いてもハナギがほどけない。対戦相手はすでにハナギを解いて、抜かんばかりの臨戦態勢。柵際に座っている元勢子の年寄りたちは、私の粗相にヤジとからかい、そして教育的罵声を情け容赦なく浴びせかけてくる。それにつられて数百人の観客も笑い出す。こうなるともうパニック。目の前が真っ白になってしまった私が、あまりにももたつくものだから、トウチャンは見るに見かねてハナギを取り上げ、解いてくれた。みんなに憫笑ひんしょうされながらも、どうにかハナギを抜くことができた。しかし対戦を終え、普段ならば意気揚々と牛を曳いて退場するときに、周りの勢子たちから「牛は一流だども、馬子(牛を曳いている人)は二流だ！」ととどめの嗤笑ししょう。そして、闘牛会の会長からは「自分の牛のハナギくらい、自分で拵こしらえねえから抜けねえんだ！」と直々の叱責を受けることとなる。

### 「伝統」の確認

闘牛は、牛がただ強ければ良いというものではない。その風格や闘いぶりが評価される。ましてや勝負をつけないこの地の闘牛では、そのような勝負以外の要因が、まさに牛の優劣を決める評判に大きな影響を与えてしまう。そしてその要因のなかには、牛を所有する人間の度量や技量、そして振る舞いというもの重要な要素として含まれている。もちろん私は、それを十分に理解はしているのだが、十分に対応できないのである。何度も失敗を繰り返してきた私は、自分が笑われるだけならばまだしも、さすがに天神の評判を下げるわけにはいかない。もう体力的に限界も感じているし、そろそろ潮時か。天神を曳くことを辞めたいとトウチャンに懇願した。しかし彼には、「牛持ちが自分の牛を曳くのが『伝統』。先生は『伝統』の研究をしてんじゃないですか！」と一喝されてしまった。

このような失態のたびに、トウチャンは「伝統」という言葉を使って私を諭し、それを私に叩き込もうとしてきた。いまでは、私もハナギを自分で拵こしらえることができるようになったが、それでも覚束無い部分が多々ある。きっと、これから「伝統」を厳しく仕込まれ続けるのであろう。

ただ、あるとき、「伝統」を仕込まれているのは私だけではないことに気づかされた。彼らは自分たちにも、自ら仕込んでいるのである。最近、牛の曳き回しやハナギの抜き方など、「伝統」が崩れて来ているということが問題になった。そして個人個人のやり方をもう一度見直そうじゃないかということになり、勢子が集まってしきたりの再確認と再統一が行われたのである。慣



天神は2012年に年間最優秀牛の栄冠に輝いた(平澤健光2012年11月6日撮影)。

れが続くと惰性となる。「伝統」的やり方を守ることに疎かになる人も出る。そこでのやり取りは、直接のきつい咎めだてではなく、手を抜いた当事者にその非がそれとなく伝わるように、間接的に苦言を呈したものであった。

### 「伝統」を育てる

彼らは、地域文化に不遜にも深入りしてしまったよそ者である私を、その「伝統」に適った人間に育て上げようとしている。しかし、そこでは私がよそ者であるかどうかが問題なのではない。自分たちが「真正」と考える「伝統」を、その担い手としてきちんと遵守し、保持できているかを問うているのである。そして、その問いは新参者の私だけに向けられているのではなく、昔から闘牛をやって来た自らにも向けられている。彼らの「伝統」意識がいつ形成されたのか定かではないが、いま、この地の闘牛はただ漫然と継承されているのではなく、その「伝統」としての要目が意識的に再確認され、再修正されているのである。そのなかで「伝統の担い手」として、自らも含め互いに育て、育てられている。闘牛という「伝統」も継承されているというより、いま「伝統」として育てられていると表現するのが、より相応しいだろう。